第１回
有吉佐和子文学賞
入賞作品集

和歌山市立有吉佐和子記念館書斎

有吉佐和子と和歌山市

有吉佐和子（一九三一―一九八四）は、昭和六年一月二十日に和歌山市に生まれました。海外でも幼少期を過ごし、八歳で帰国した際に見た青い紀の川の美しさに感動し、二十年後に小説「紀ノ川」を発表。
他にも「助左衛門四代記」「華岡青洲の妻」など、ふるさと和歌山を舞台とした多くの作品を著しました。また、社会派小説「複合汚染」「恍惚の人」や歴史小説「和宮様御留」、ミステリー「悪女について」「開幕ベルは華やかに」など、創作活動は幅広いジャンルに及びました。
さらに、その多才ぶりは小説にとどまらず、ルポルタージュや演劇の脚本・演出等広く才能を発揮し、いずれの分野においても高い評価を受け、一時代を築きました。

和歌山市では、有吉佐和子記念館の開館を契機に、本市の偉人である作家・有吉佐和子の顕彰に加え、文学について学ぶ機会を提供すること及び本市の文化的風土を醸成することを目的として、令和五年十二月に、塚本治雄基金を活用させていただき、有吉佐和子文学賞を創設しました。

本文学賞では、有吉佐和子のように一つのテーマにとらわれることなく、自分自身のこと、世の中のこと、和歌山への想いなど、思ったままに、感じたままに表現したエッセイを募集し、第一回目である今回、全国から二〇七七作品もの応募をいただきました。

本文学賞が、多くの皆様方に創作の喜びや楽しさを感じていただき、有吉作品をはじめとする「文学」の魅力に触れていただく一助になれば幸いです。

ふるさと和歌山のような温かい、そして末永く愛される文学賞となることを願います。

和歌山市

目次

最優秀賞	「手紙」	山梨県南アルプス市		日沼 よしみ	4
優秀賞	「杜鵑草」	愛媛県伊予郡松前町		原 徹	8
佳作	「胸の中でひかるもの」	東京都足立区		桑原 祥恵	12
	「私を生かす心の栄養」	東京都杉並区		後藤 里奈	16
	「和歌山にて、星を繋ぐ。」	兵庫県神戸市		武智 弘美	20
	「継承の地」	大阪府大阪市		松村 典子	24
	「梅騒動」	福岡県福岡市		森 美恵子	27
奨励賞	「姉になった日」	東京都板橋区	クラーク記念国際高等学校	鏑木 花野	31
	「八週五日」	和歌山県岩出市	智辯学園和歌山高等学校	谷 和佳乃	35
	「インスタントコーヒーの粉」	和歌山県和歌山市	和歌山市立西脇中学校	辻 拓真	38
	「酒という謎」	宮城県仙台市	東北学院高等学校	芳賀 永都	41
	「高校生が愛について考えてみた結果」	神奈川県横浜市	ホライゾンジャパンインターナショナルスクール	藤田 椛子	44

第1回　有吉佐和子文学賞　入賞作品集

最優秀賞

「手紙」

山梨県南アルプス市
日沼　よしみ

今年、後期高齢者に突入した私。腰こそ曲がってはいないけれど、髪は何年も前に染めるのを止めたので真っ白だし、新聞を読むのに老眼鏡の上に拡大鏡を掛けなければならないこともあります。子供たちと一緒に近くの神社にお詣りすれば、石段でつまずいて顔中血だらけになる始末。そんな私が、実は今、胸がどきどきするような恋をしていることを誰も知らないでしょう。

それはある日のことでした。押し入れの整理をしていた私の目に、ずっと奥のほうで、ひっそりと息をひそめているかのような段ボールの箱が目に留まりました。見つめることしばし。所在こそ忘れはしなかったものの、今更という気恥ずかしさもあり、ついぞ開けてみようなどと思ったことのなかったそれが徐々に、まるで玉手箱のごとき光彩を帯びてきました。私はうっすらとした埃を払い、ガムテープを丁寧にカッターナイフで切り裂きました。中には、ぎっしり詰まった色あせた手紙の束が。少しの躊躇のあと、私は一通、二通と手に取り読み始めました。忘れていた記憶がくゆり立ち、覚えている記憶には、まるで淡い

水彩絵の具が乗るように感じながら、次から次へと手が伸びました。年甲斐もなく、なつかしさで胸をいっぱいにしながらね。

それはなんと、そのむかし、四年半に亘って、あなたと私とで交わした二百六十通あまりの手紙の束だったのです。

そう、そうね。あなたと私は、中学三年生のときの同級生でした。たまたま同じ高校に進学し、あるころから自転車を並べて帰る日が出はじめ、そして、高校卒業と同時に東京の専門学校に進学したあなたと、郷里に残った私との間で文通が始まったのね。

公衆電話での遠距離通話ではポトリポトリと十円玉を落とし続けなければならなかったあの時代「別々の暮らしのほんの一部を結ぶたったひとつの手段のこの文通が、虚栄や偽善に陥らないように」と、全く信じられないほどの生真面目さで確認を取り交わしています。なんと微笑ましいではありませんか。

お互いにほのかな好意は自覚していたのでしょうけれど、男子ばかりの寮生活を送るあなたにとって折々に届く郷里の女友達からのそれは、きっと郷愁を誘う暮らしの潤いとして存在感を増していったのでしょう。私の手元に「生涯、大切にするよ」と書かれた分厚い手紙が届いたのは、文通が始まって四年近くが経った頃のこと。待ちわびたあなたからのプロポーズでした。

ああ、あれからもう五十年以上の歳月が流れたのですね。約束通り、あなたは真面目に、本当に愚直なまでに真面目に、ひたすら私たち家族のために働いてきてくれました。

望まずに病を得るあの日までは。

あなたがパーキンソン病を発症して十八年が経ちました。完治する薬のない進行性の難病で、寝起きには介助が必要、歩行も出来なくなりました。内臓の機能も衰えてきたので排便は人工肛門。去年の秋には誤嚥性の肺炎になり、私は子供たちと相談し、とうとう胃ろうの造設をお願いしました。だって、あなたは認知症もずいぶん進んで、そんな重大なことの意思表示も、今はもう出来ないんですもの。美味しいもの大好き人間のあなたが味覚を失って、今、どんな気持ちでいるのでしょう。ねぇ、あなた。これでよかったのかしら。あなたは今、幸せですか。

現在もあなたは入院中。実はね、先日、退院を想定して主治医との面談がありました。「介護量は一段と増してきますが、まだ家で看るということでいいのかな」ですって。私はふと、二人で交わしたずっしりと手に重たいあの手紙の束を心に思い浮かべます。若く、まだ私たちがそれなりに輝いていたあのころ、やさしさとユーモアとに満ち満ちたあなたからの手紙を、私は胸ときめかせて待ち焦がれたものでした。時は流れ、コロナ禍で面会も叶わず、不安でいっぱいな日々の連続だったあの日あの時。まるでこの時を選

んで現れたかのような古い手紙の束を、私はこみ上げる熱い思いと一緒に抱きしめました。

こんなにも私を励まし、幸せにする贈り物が今までにあったでしょうか。そして、目頭を押さえつつ、この手紙を出発点として共に過ごした歳月もまた、何物にも代え難いあなたからの贈り物であったことに気が付きます。

たくさんの感謝とともに来しかたを振り返りつつ、私は繰り返しあなたからの手紙を読みながら、二度目の恋をしています。

あなた、大丈夫。私はがんばれる。もし、あなたが私の名前を忘れてしまったとしても、あの手紙を交換し合ったあのころと今とは、ずっと繋がっているのだから。私たちの出発点で「生涯、大事にいたわるよ」と誓ってくれたあなたが、今の私をこうして立たせてくれているのだから。だからね、私はがんばれる。がんばれるよ。大丈夫。

優秀賞

「杜鵑草」

愛媛県伊予郡松前町
原　徹

杜鵑草は秋の草花である。地味ではあるが、晩夏から初冬まで長期間にわたり、日陰でも咲く生命力の強さゆえに、「秘めた思い」という花言葉を持つ。

五年あまり前の八月末、病のために入院した妻は、娘にわが家の食事の支度を託した。ただ、ほとんど家事経験がなかった娘の料理は当初、食材を大胆にぶつ切りし、調味料で煮込む程度の素っ気ない料理であった。私の報告を聞いて、さすがに妻も心配になったのか、

「毎日、作った料理の写真を送りなさい」

と娘にメールで依頼した。娘からの写真を見てアドバイスをするためだ。そして、上手に料理ができた日には、

「今日は上手にできたみたいね。褒めて伸ばしてあげてください」

と妻から私にメールが送られてきた。

入院から約三か月後の十一月十五日、妻が亡くなった。入院当初からずっと絶食だった妻は、一度も娘の料理を口にすることができなかった。

通夜法要の後、僧侶に呼ばれた私は、妻の戒名について説明を受けた。
「入院中、奥様は料理の写真をメールで送るようにと、娘さんに頼んでいたそうですね。ご自分は何も食べられない状態でありながら、家族の健康を気遣う奥様の秘めた思いだったのでしょう。ちょうど今の時期に咲く杜鵑草には、『秘めた思い』という花言葉があります。入院されていた時期も杜鵑草の開花時期と一致しますし、奥様に相応しい花言葉だと思いましたので、戒名に『杜』という文字を入れることにしました」
その話を聞き、私にも思い当たる節があった。妻は自分の余命が残り少ないことを知りながらも、家族の前では、いつもと変わらぬ表情で世間話をしては、よく笑っていた。意識が朦朧とすることが多くなってからも、無理に笑顔を作り、ほとんど出ない声を振り絞ってまで世間話をしようとしていた。それが家族を気遣う妻の心尽くしであることは、鈍い私にも痛いほど分かった。戒名の由来が花言葉というのも、ガーデニングが趣味だった妻に相応しい。ただひとつ残念なのは、私が杜鵑草という花を知らないことだけであった。
葬儀、火葬、初七日法要、精進落しと、すべてが終了したのは、午後七時を少し過ぎたころだった。葬儀場の外は既に闇に包まれ、ひんやりとしていた。
横にいた娘が、
「さっきお坊さんから聞いたけど、お母さんの戒名って、杜鵑草から付けたんだってね」

と話しかけてきた。私に似て花の名など知らない無粋な娘のはずだが、なぜか杜鵑草を知っているような口ぶりが気になった。

「どんな花か知っているのか。父さんは知らないのだけど」

すると、娘が少し驚いた表情で、

「お父さん知らないの。うちにあるよ。野村の家から持ってきた杜鵑草だって、お母さんに教えてもらったことがあるよ」

とわが家の杜鵑草の由来を教えてくれた。

野村の家とは妻の生家だ。妻は愛媛県南部の野村町という山間の小さな町で生まれ育ち、九歳の春に現在の実家に引っ越した。その際に、野村の家にあった杜鵑草を妻の母親が現在の実家に移植し、後に、新築したわが家の庭にも、その杜鵑草を分けてもらって植えたのだそうだ。

自宅に帰るとすぐ、その杜鵑草の所在を娘に教えてもらった。

「ほら、あそこ。一階の和室の前庭にあるのが、お母さんの杜鵑草」

そう娘が指し示した先には、ほとんど散りながらも、わずかに花を残した杜鵑草が、冴え冴えとした月明かりに照らされていた。

葬儀から一か月後、開眼供養のために訪れた僧侶にわが家の杜鵑草を見せ、その由来を

話した。僧侶もそんな杜鵑草の存在を知る由がなく、
「何か因縁があるのでしょうねぇ」
と驚いた表情で見つめていた。
　半世紀以上にわたって妻とともに生きてきたわが家の杜鵑草。その杜鵑草が妻の戒名の由来になったというのは、単なる偶然とは思いたくなかった。それ以来私は、わが家の杜鵑草を妻の分身だと思って大切に育て、事あるごとに話しかけている。
　杜鵑草という植物は、あまり手をかけなくともよく育つ。地上部が枯れても、根元から新たな芽を出し、枯れかけた茎を切り分けて土に挿すと、次々と芽を出し葉をつける。それならば、力強い生命力を持つ杜鵑草のように、妻にももっと長く強く生き抜いてもらいたかった。
　庭を見ると、杜鵑草が気持ちよさそうに、そよ風に揺られている。家族を深く愛した妻の秘めた思いを、今なお宿すかのように。

佳作

「胸の中でひかるもの」

東京都足立区
桑原　祥恵

大学の四年間、わたしは学生寮に入っていた。門をくぐり敷地に入ると、手前に男子寮が、奥に女子寮がある。東京のはずれの、緑に囲まれた寮だった。

家賃が安く（月額約二千円）、入寮には保護者の所得制限があったため、わたしも含め、裕福な家の子は一人もいなかった。

学費を自分で負担している学生も多く、みな携帯電話を持つ余裕はなかったので、電話は談話室の公衆電話でかけた。家族にも友人にも恋人にも。会話は完全に筒抜けで、プライバシーはほとんどなかった。

二人一部屋で鍵もエアコンもなく、トイレもお風呂もキッチンもみな共同だった。

それでもわたしにとってその四年間は、楽園みたいに楽しかった。

全国各地から来た、同じ年頃の女の子たち。その一人ひとりとゆっくり友達になり、少しずつ少しずつ、家族のようになった。

夜中にみんなで観るホラー映画も寝不足のまま一緒に食べる朝ごはんも、並んで入るお風呂も交代でする洗濯も当番制のトイレ掃除もなにもかも、彼女たちと一緒なら、ぜんぶ楽しかった。

長い長い、キャンプみたいだった。

卒業の年の三月。

それぞれ就職と引っ越し先が決まり、一人また一人と寮を出ていく季節は、寮全体がひっそりと息をひそめているようだった。開け放たれた窓から入るやわらかな春風、沈丁花の香り。

「いつか、おばあちゃんになったらさ、あたし、さちの隣に部屋を借りるよ。」

わたしの引っ越しが二日後に迫ったその日、六人ほどで夜ごはんを食べていると、ふと、誰かがそんなふうに言った。

「それいいね」「あたしもそうする」「そういうアパート見つけようよ」
みなが口々に言い、しんみりしていたその場が、ぱっと一気に華やいだ。

「年を取ったらまたみんなで同じアパートに住む」。
もう一緒に暮らさないのだ、という寂しさと、一人ずつ新しい場所に出ていくのだ、という不安に、びょうびょうとつよい風に吹かれるような心細さを感じていたわたしたちの胸に、そのアイディアはあたたかく灯った。

あれは決して約束ではなかったし、現実的なアイディアでもなかったけれど、その時のわたしたちにぴったりと必要な、お守りのような何かだった。わたしたちが別々に暮らすなどという非現実的な明日より、はるか未来のそのアパートのほうが、ずっとリアルに感じられた。
だからこそきっとあんなふうに、その場にいた全員が、無条件にその未来を信じたのだろう。

おばあちゃんになった彼女たちと一緒に暮らすアパートが、今でも不意に頭に浮かぶ。

鍵もエアコンもちゃんとあるそのアパートで、離れて暮らしたことなど一度もなかったみたいに、わたしたちは暮らすだろう。

ときどき誰かの部屋でマックパーティをして、いつかの恋の話に笑うだろう。

新しい思い出を作りに、飽きることなく一緒に出かけていくだろう。

あのとき、白昼夢を見るように友人たちと強く信じたその場所は、ここではないどこかの世界線に、ほんとうにあるのかもしれない。

どこかの世界のその場所は胸の中であたたかい光を放ち、今でもそっと、わたしを励ましている。

佳作

「私を生かす心の栄養」

東京都杉並区
後藤　里奈

忘れられない味がある。

今から約十七年前、私は晴れて都内の大学へ進学が決まり、地元岩手から一人上京した。生活費を抑えるため、キャンパス内にある寮に入り、期待と不安のなかで私の大学生活は始まった。だが悲しいことに、憧れのキャンパスライフは私のイメージとはかけ離れていた。私が入った寮は、特に規則の厳しいことで有名な女子寮だったのだ。四畳半にベッドと机があるだけの部屋で、下級生の私は上級生の先輩と一緒の二人部屋であった。トイレやお風呂、台所はすべて共同で、使える時間も決まっていた。掃除や電話番などの当番を忘れたり、門限を破ったりしたら謝罪文を書き、罰として風呂場や洗濯場の排水溝掃除などをさせられる。初めての共同生活は戸惑いと緊張の連続だった。

だが、プライバシーや自由が少ない代わりに良い面もあった。いつでも助け合ったり、話したりできる友人がいることは心強く、全国各地から来ている様々な人との出会いは、私に多くのことを教えてくれた。そして、そんな生活にようやく慣れてきたある夏の日、

実家で暮らす弟の訃報が届いた。あまりに突然のことに、私は現実を受け入れられなかった。

五歳年の離れた弟は、教師になるという私の夢を誰よりも応援してくれていた。上京する日も駅まで見送りに来てくれ、「夏休みになったら帰ってくるから、それまでお互い頑張ろう。」と約束したばかりだった。あと数週間もすれば会えるはずだったのに――。葬儀を終えたあとも、私はまだ弟の死を信じられなかった。交通事故であっという間に逝ってしまったため、おそらく弟自身も、よく自分の死を理解できていなかったと思う。

心にぽっかりと穴が空いたまま東京に戻ってきた私は、四月に初めて上京してきた時よりも心細い気持ちで、寮への道をとぼとぼと歩いていた。これから何を心の拠り所にしていけばよいのだろう。人はこんなにも簡単にあっけなく死んでしまうものなのだろうか――。

沈んだ気持ちで寮の部屋に入ると、事情を知っていた先輩は「お帰り。」といつものように声をかけてくれた。その先輩は和歌山の出身で、初めは少しぶっきらぼうな話し方に戸惑いを感じたが、飾らず自然体な人柄のおかげで、私はあまり気を遣い過ぎることなく、いろいろなことを相談できた。そんな先輩に普段と変わりなく迎えられ、張りつめていた私の心はわずかに和んだ。だが、お互いその後はかける言葉が見つからないようで、気まずい空気が流れた。すると先輩は部屋から何かを持って出ていった。「気を遣わせないように一人にしてくれたのかな。」と思い、申し訳ないような気分になった。だがしばらくすると、

「良かったら食べて。」と言って、おにぎりを持ってきてくれたのだ。それは全体が高菜でくるまれた、今まで見たことのないおにぎりだった。食欲はなかったが、白米が好物の私は思わず心を惹かれた。一口齧ると、爽やかな高菜の浅漬けとご飯がよく合い、絶妙な塩加減で、新鮮な美味しさが口の中に広がった。中には細かく刻まれた高菜漬けが入っていた。その食感も楽しく、すぐにもう一口食べたくなり、あっという間に二個平らげてしまった。食べ終わると、本当はとても空腹だったということが自分でもわかった。先輩は満足そうに、これは和歌山の郷土料理の一つ「めはり寿司」であると教えてくれた。名前の由来は、「目を張るように大きな口を開けて食べる」という説や、「目を見張るほどおいしいから」などという説があるようだ。落ち込んだ私を少しでも元気づけるために、普段は自炊などめったにしない先輩が珍しく作ってくれたのだ。そのさりげない優しさが嬉しく、お腹だけではなく心も満たされた。

心のこもった食べ物には、それを作ってくれた人や、一緒に食べる人の想いが隠し味となり、食べ物以上の栄養になるのだと思う。それは体の内側からエネルギーを湧き起こしてくれるものでもある。そして美味しさとは、相手との「おいしい関係」が何よりも大切なのだとしみじみ感じた。

あれから十七年。私は長年の夢を叶えて教師となり、日々奮闘している。あの時食べためはり寿司は、間違いなく私に生きる元気と力を与えてくれた。もう口にすることはないかもしれないが、その味は心の栄養となって私を生かしてくれている。子供たちにも、困っている人や悲しんでいる人に対して、自然に手を差し伸べられるような人になって欲しいと思っている。

あの先輩は、今頃どうしているだろうか。時折思い出しては、あのめはり寿司を無性に食べたくなってしまう。

佳作

「和歌山にて、星を繋ぐ。」

兵庫県神戸市
武智　弘美

ほんとうは和歌山に行くはずではなかった。その日休みが取れたわたしは、神戸から日帰りで行ける街を探していた。最初は北へ向かうつもりだった。ところが数日前に寒波が来て、大雪になった。かわりにどこか暖かい街はないだろうか、できれば素敵な図書館か美術館のあるところがいいな。そうしてわたしが思いついたのが、和歌山市だった。とてもいい感じの図書館があると、聞いたことがあったのだ。わたしは急きょ、和歌山に日帰り旅に行くことにした。

大きな街を通り過ぎ、空港付近で旅人たちを降ろしたあと、電車は緑のなかに入る。やがて視界が開け、紀の川をわたる。心がひろびろとする。わたしの生まれ育った広島の山あいの町にも、大きな川が流れていた。なつかしい。

和歌山市民図書館の一階には、書店とカフェが併設されていた。コーヒーの香りが漂う、おしゃれで明るい本屋さんだ。気になる本がたくさんあって、うきうきする。

わたしの生まれた小さな町には、本屋さんがなかった。雨が降って農作業ができなくな

ると、父親はわたしを街の本屋に連れて行ってくれた。しかし、晴れが続くと本屋に行けなくなる。そうなると、わたしに禁断症状が現れはじめる。本屋さんの夢を見るようになるのだ。あの頃のわたしがこの本屋さんを見たら、どんなに喜ぶだろう。

二階図書館の書架も美しかった。行儀よく並んだ本たちは、どこか誇らしげで気品があった。読みこまれた本たちも愛おしい。広々とした空間には、子ども向きの部屋や学習室もある。人が学び、本に親しめる空間。こんなに素敵な図書館がある街を、心からうらやましく思った。

この図書館では、移動図書館車にも力を入れている。移動図書館車！　むかし大好きだった。車内にはぎっしりと本が並んでいて、そこから運命の一冊を探し出すのだ。

子どもの頃、移動図書館車で出会った『もしもしニコラ！』という児童文学作品を今でも覚えている。都会に暮らす少女があてずっぽうに電話をかけ、たまたま繋がった男の子と友達になる話だったと思う。偶然の出会い、そこから始まる繋がり。人生にはこういうことがあるからおもしろい。

世の中が便利になって、みんなが効率を求めるようになった。検索すれば簡単に答えが見つかり、情報を得るだけなら本屋も図書館もいらなくなる。なんでも時短とコスパの世界。でも、余計なことこそおもしろい。たまたま隣にあった本から新しい世界が広がることも

あるし、予期せぬ出会いに胸がときめくことだってある。物語は偶然によって動きだす。

そもそもこの和歌山への旅がそうだった。あの日寒波が来なければ、この図書館にその後何度も足を運ぶことはなかった。

そのきっかけとなったのが、「有吉佐和子文庫」と呼ばれる部屋だった。ここでは和歌山市出身の作家、有吉佐和子の作品や、作品にまつわる本が紹介されていた。その時は、移民に関する書籍がテーマだった。ここでたまたま知った、海を渡った移民たちの人生に、わたしは強く惹きつけられた。なぜだかわからないけれど、胸がドキドキした。有吉佐和子の『非色』を借り、夢中になって読んだ。異国の地で差別にあいながらも、ユーモアと冷静さで生き抜く主人公に魅了された。調べれば調べるほど移民たちに興味がわき、その後もわたしは何度も「移民資料室」に足を運ぶこととなった。

わたしが移民たちに惹かれたのは、広島県出身だったということもあった。じつは広島県は、和歌山県と同様、かつて多くの移民を出した県である。新天地を求めて海外に向かった移民たちは、強制収容所に入れられ、過酷な労働を強いられた。しかし彼らは勤勉でよく働いた。生活は厳しいものだったが、そんななかから日本に多くの送金をした者もいたのだという。

彼らが海外に移住したのは、生活のためだったそうだが、わたしは冒険心もあったので

はないかと思う。もしかすると和歌山や広島など、大きな川の近くに生まれ育った者は、やがて大海に出て行くような開拓者精神を持ち合わせていたのかもしれない。

わたしがいま住んでいる神戸も、移民との関わりが深い場所である。移民たち、和歌山、広島、神戸、大きな川。なんの関係もないように思えたことが、一本の線で繋がった。古代の人たちは、天上にある星を線で結び、星座をつくった。そしてそこに、神話を生み出した。ほんとうは出会うはずのなかった星たちが繋がって、やがて物語が生まれる。もしかするとここから、何か新しい物語が生まれてくるかもしれない。そう考えると、ワクワクしてくる。

佳作

「継承の地」

大阪府大阪市
松村　典子

「フェアー・イズ・マウント・ワカ？」

（和歌山という山はどこにありますか？）

ビッグ愛の展望ロビーで、遠くの景色を観ていたときに、近づいてきた外国人旅行者に尋ねられた。私は即答できず、

「インターネットで調べてみるので少し待ってください。」

と言いながらも、紀の川や和歌川はあるので和歌山もあるはずだろうと考えていた。

しかし、答えは

「ゼア・イズ・ノー・マウント・ワカ！」

和歌山に和歌山は無いのであった。

山がつく由来は、虎伏山に築いた山城が、和歌浦を望み、和歌山城と呼ばれたからのようだ。和歌山城に行くのならバス停まで案内すると申し出てみた。停留所までの道を歩きながら会話が弾んだのは、その旅行者はトルコ人で、明日は串本のトルコ記念館に行くと

言うのだ。エルトゥールル号を助けてくれた和歌山の紀伊大島の人に感謝をしていて、長年訪れてみたい場所だったようだ。

「テシェキュレデリム」トルコ語で「ありがとう」の挨拶を思い出した。私は、世界を旅することが好きで、トルコを訪れたときにも深い人情に触れた。

首都アンカラで、私がどのバスに乗ったらいいかわからなくて声を掛けた人が、バス停まで連れて行ってくれて、運転手さんに私の降りる場所を伝えてくれた。バスは進んでいき、運転手さんは私が降りる停留所で教えてくれた。そして、お金は要りません、あなたを乗せた人が払ってくれているからと微笑んだ。

時を超えて、私は旅人をバスに乗せて運転手さんに頼み、「テシェキュレデリム」あのときのお返しをすることができた。

トルコはエルトゥールル号の救助のお礼にと、イラン・イラク戦争のときに停戦時間が迫る中、日本人をトルコの飛行機で脱出させてくれた。紀伊大島の人の善意は、百二十五年後に国を動かす恩返しになった。感謝の気持ちは百年以上も続くことを和歌山とトルコの交流から学ぶことができた。

反対に、憎しみの気持ちも続くのだから、今、戦争をしている人は未来の人のためにやめて欲しいと思う。

人の気持ちは、次の世代に無形の継承として増幅していくのかも知れない。
和歌山には和歌山がないという、何気ない会話がきっかけからでも、良い連鎖が始まると嬉しい。もしかしたら次は、私の孫が助けられる未来があるかも知れない。
私に世界を動かすことはできなくても、一人の人の心を動かすことは出来る。挨拶をしたり、困っている人がいたらお手伝いをしてみるだけで小さな世界平和が継承されたら素敵なことではないだろうか。和歌山はそんな継承の地なのだ。

佳作

「梅騒動」

福岡県福岡市
森　美恵子

母が梅干しを漬ける。
漬け続けて、もう何十年にもなる。
毎年コンスタントに漬けていたわけではないけれど、
「いかにも自家製」という感じの、けっしておいしくはない梅干しが我が家の定番であった。

ある年、梅の壺を覗き込んだ母が
「これは悪いことが起きる」と、低い声で騒ぎ出した。
なんでも、その数年前に一度、梅干しを腐らせたことがあったらしい。そんなことは初めてで言い出せずにいたが、その年に叔父が亡くなったという。
「梅干しが腐る、ってどんな？」私も一緒に梅壺を覗き込む。梅にフワッとしたカビがついている。「これで二回目よ。長年漬けてきて腐らせたことなんてなかったのに」と、母は深刻そうな顔で壺の中の梅を菜箸でつついた。

あたりまえのことだが、母の梅干しの出来と叔父の命は別物だ。叔父はそういうお年頃だったし、普段はどちらかというと迷信じみたことには興味がない母がどうしたというのか。

しかし、その二度目の失敗の年に父が倒れた。これに母は震え上がった。

「やっぱりあの梅干しが！」

刑事ドラマに出てくるような顔をして、私を見つめコクリと頷く母だったが、私から言わせれば今回もまた、たまたまである。梅を腐らせた年に父は倒れたが、父が倒れたのはそれが初めてではない。しかし母の中で梅との因果関係が確信に変わったようだった。

翌年から、実家に帰るたびに「今年の梅干しは腐れませんように」と祈るように梅壺を見つめる母の姿を頻繁に見かけるようになった。何かしら声をかけてあげたいが、梅の話になると二度の失敗を思い出し悲観にくれるだろう。だから私からは何も言えない。見守るのみ。

母は「家族の無事は自分の梅干しの出来にかかっている」という、謎の使命感にみちた顔をして梅干しを漬けているが、また腐らせたらどうするつもりなんだろう。

「今年は大丈夫だった」という時の、母の安堵の表情を見るたびに「そんなに心配だったらもう漬けなきゃいいじゃない」と思う。
だが母は漬け続ける。
なんだか私まで毎年の出来が気になるようになってきたので、さすがに調べてみることにした。
〈梅干　腐る〉で検索。
そこで得た知識としては、梅干しがなかなか腐らないのは「塩分濃度の高さ」と「梅に含まれるクエン酸の活躍」によるものだということ。昔から沢山の塩を用いて漬け込み、保存食となってきた梅干し。なるほど。
ちょっとした梅博士になって自信がついた私は早速母に問うてみた。
「お母さんの梅干しの塩分濃度ってどれくらい？」
母はきょとんとした後に自信に満ちた表情でこう言った。
「私の梅干しはね、家族の健康を思って塩分控えめよ！最近はおいしくしようと思って何でもかんでも塩分過多でしょ。あれはダメね。体に悪い。だから私のは塩分控えめ」
「控えめ、ってどれぐらい？」
「そんなのわからないわよ。だいたいの目分量よ。でも前よりずっと少なくしてる。その

方が良いでしょ」
ああ…それだ！と、思った。
母よ、それが原因だ。塩分過多が我々の体によくないということは知っている。しかし、だ。梅干し作りにおいて、しかも素人の手作業で目分量の塩分控えめはずいぶんと危険。さらに話を聞いていくと、最初に梅干しにカビがついた年と母が減塩を志し始めた時期が一致した。
これで原因が判明したとはいえ、母は家族の健康を思っての「塩分控えめ」に、ちょっとした誇りがある様子。私が「ちゃんと沢山の塩で漬け込まないとまた腐れるから」とアドバイスしたところで言うことを聞くか怪しいところだ。
私は少し考えてこう言った。
「来年の梅は一緒に漬けたいな。私にもお母さんの梅干しの漬け方を教えてよ」と。
母は勢いよくこちらに振り返り、神妙な面持ちで「塩分控えめで作るわよ」と笑った。

奨励賞

「姉になった日」

東京都板橋区　クラーク記念国際高等学校
鏑木　花野

日が傾いてくると窓の外から聞こえてくる奇声。静寂の心地よい図書館に響きわたるどたどたという足音、宇宙人語。人をじろじろと眺める、不躾な目。無視しようと心がけても五感で脳内に伝わってくるそれらが、ずっと嫌いだった。

子供は苦手だ。未就学児はすぐ泣くし、得体が知れない。小学生は話が通じないし、うるさい。SNSやテレビで見る子供が天使張りの顔をしていようが、可愛いとは思わない。赤鬼みたいな顔してぎゃあぎゃあ泣き喚くくせに、と毒づく。「子供」「赤ちゃん」ではなく、総じて「チビ」「チビども」と呼んでいるくらいだ。かつては己もチビどもの構成員だったというのに、おかしな話である。

私は今のところ飲食物や薬にアレルギーを持っていないが、人に対してのそれがあるとするならば差し詰めチビどもアレルギーだろう。物心ついたころから下級生や小さい子を避けるきらいがあった。バスや電車で彼らの傍に座らないよう努め、泣いたり騒いだりするチビが居ようものなら「ふん、ガキね」と見下していたものだ。しかし私の意志に反し、

母はそういうチビどもを見てにこにこし、あまつさえ「可愛い」と言う。私はそれを見るのが大嫌いだった。自らの娘を差し置いて、よその子に可愛いとはなんだ、そんなにも若いのがいいのかと。母の関心が一瞬でも逸れたことへというより、自分より人に可愛がられる子がいることへの嫉妬だったのだと思う。身内に私より年下の子がほぼいない、というのがその一因だ。弟妹は勿論のこと、いとこ、はとこ、どれも見たことがない。会ったことのないはとこなんかは大勢いるし、その中には年下もいるだろうが、知らないならいないも同然である。かくして年上の親戚達に可愛がられ、天上天下唯我独尊少女は育った。成人を目前にした今は謙虚になるということを覚えたが、それでも年下の子が居ないので、少子化だからなあ、と楽観視していた。

二〇二三年一二月。年齢的にきつくなってきたお子様用の玉座から、ついに下りる時がきた。母の従兄弟夫婦に双子の姉弟が生まれたのだ。正直に言うと良い気持ちではなかった。それなのに、家が近くにあるということで、母は手伝いを申し出た。表面上いい子ちゃんの私も一緒に、生を受けて二か月にも満たない彼らに会いに行った。

甘い香りのする家に入ると、女の子のほう——ここではチビ子ちゃんとする——がミルクを飲んでいた。体格のがっしりしている父上に抱かれ、物凄い勢いでミルクはなくなっていく。授乳が終わると、従弟叔父に「抱っこしてみる?」とチビ子ちゃんを渡してもらった。意

外なことに、泣かない。着せ替え人形のメルちゃんとも、ふれあいコーナーの兎とも違う抱き心地。頭が私の手に収まるくらい、手と足は落ち葉よりもまだ小さい。そのうち奥から男の子のほう―チビ太くんとする―も授乳を終えて抱かれてきた。チビ太くんもまた大人しく私の腕の中に納まった。温かくて甘い香り、ミルクの香りだ、と気付いた。完全に私に身をゆだねて眠っている。こんなに信頼されていいのかなと思った。

帰り道は放心状態だった。自分一人でできることはほとんどないのに、腕の中で確かに生きていた彼らは、人形や兎とは比べ物にならない存在だ。命を動かす主要な臓器は大体大人と同じものが入っているのに、今まで接した誰よりも生命が近くに感じられた。生きることが当たり前になって、そこに感情もあり、学業や仕事、遊びもする私達とは違い、彼らは「生きる」ということだけに専念しているからだろう。誰かの命が自分に寄りかかってくるという経験を初めてした。興奮の赴くまま友人に連絡すると、このような返事が来た。「生まれてきてくれて、ありがとうだね！」納得の一言だ。彼らが生まれてきて、私に巡り合ってくれたことが嬉しい。秀でた能力を持った子になんてならなくてもいいから、ただ優しさを浴びて元気に育ってほしい。子供服の店に入って「こういう服をプレゼントしたい」と考えてしまう。子育て支援の政策について熱弁する政治家に頷く。苦手なはずのチビどもに、二人の姿を重ねる。親ばかという言葉があるけれど、そうなってしまうのも

分かる気がする。チビどもの家族も、我が子や兄弟が誰かに憎まれていると知ったら悲しむだろう。今後チビどもが手を振ってきたら、振り返さんこともない。

彼らの未来を見ることが、私の生き甲斐の一つになった。私は君たちが生まれてきてすごく嬉しかったよ、と伝える日を想像する。そんな思いを誰かに向けるなんて今までの自分ではないみたいでくすぐったいけれど、それもそのはず、芽吹き始めた命を抱いたあの日、私は彼らの姉になったのだ。

奨励賞

「八週五日」

谷　和佳乃
和歌山県岩出市　智辯学園和歌山高等学校

八週五日。十七年前、二センチ程の私は、母の羊水の中でゆらゆら浮かんでいた。頭と身体の大きさが同じくらいで、卵黄嚢という卵の黄身を抱えている。胸のあたりで鼓動をとくん、とくんと鳴らしている。

その超音波写真には「一条の光」という母の手書きの言葉が添えられていた。私はそっと母子手帳を閉じた。私はいつの日もひとりではなかった。

まるでへその緒みたい。「ぽたぽた」と雫はチューブの中に零れ落ちる。甘ったるいみるく色の食事は、そのまま胃に流れていき、姉の命を繋ぐ。

母と姉の歩んできた時は、紀伊山地の季節の中で、漂いながら心に染みる。医療的ケア児だった姉も二十一歳になった。母は自分の命を削りながら姉に栄養を送る。

この頃、母はなにかと手間取ることが増えた。きっと母の指が少し曲がってきているからだろう。母の姿が明日の自分に重なった。

あの頃の私は、ちっともさえない顔だった。理由ははっきりしている。ある時、心無い

不用意な言葉をかけられたからだ。姉に向けられた言葉なのか、妹の私になのかは分からない。ただその日を境に、言いかけては言葉に詰まり、姉の存在を友達に言えなくなった。ひょっとしたら友達が友達でなくなるかもしれないからだ。適当に流しておけばいいのに、卑屈になり反発する私が目に浮かぶ。

大切な家族が社会の一員から離れた場所にいるという現実は抗うことはできない。姉の一番の理解者でありたいと願う私が、姉の重みに潰されそうになった。

そこからは転がり落ちるように、私の歩みはもつれ、進めなくなった。何をやっても上っ面で、のめり込めない自分にがっかりした。笑っておけばいいのに、知らないうちに深い底に沈んだ。

そんな立ちゆかなくなった私の価値観を一転させてしまう出逢いがあった。

「一条の光」という母の言葉だ。口に出して言ってみると、すとんと私の胸に落ち、生き返っていく感じがした。桐箱の中で乾いていた私のへその緒は、とくんとくんと脈を打ち始め、渇いた魂を潤した。

母はもちきれない悲しみのなかで、新しい命に希望を託した。その母の思いが、今、私の身体中を巡った。母は私の命を望み、私を必要とした。母と私は今も見えないへその緒で繋がっていたのだ。私の口元に笑みがこぼれた。

言葉は強いちからを宿している。言葉によって傷つくこともあれば、救われることもある。私にとって「一条の光」は、血のように流れ、渇いた魂を潤した言葉であった。

魂を揺さぶる言葉は、生きる問いを考え、誰よりも深い底にいた者だけが感じることができる。

道に迷えし時、私はこの言葉をこれから何度も繰り返し口にするだろう。ときにはお守りのように、ときには羅針盤のように人生を照らすであろう。

行き場のない絶望のなかで、誰かに必要とされていること、そこには希望という気高い光が降り注ぐ。私は言葉の光に包まれた。自分自身の人生や友情を手に入れる喜びが私を待っている。

三十八週一日。推定体重二九〇〇グラム。明日産まれる予定の私は、背中を丸め、身を守っている。迷い無く生きようとする姿は巣立ちを待つ小鳥のようだ。大丈夫、産まれておいで。

奨励賞

「インスタントコーヒーの粉」

和歌山県和歌山市　和歌山市立西脇中学校
辻　拓真

二年生も三学期に入り、部活や勉強の忙しさに拍車がかかってきたという頃、私は溜まりに溜まった宿題たちを机に広げ、頭を抱えていた。もう何度味わったかも分からない後悔に、思わずため息が出る。しかし、今まで散々サボってきたのに、このまま二年生も終えてしまえば、卒業後の進路が心配で仕方ない。そこで私は、今提出できる分の宿題だけでも、必ずやり切ると決意したのだった。

作戦決行一日目。駆け足で学校から帰宅した私は、夕飯などを終え、スマートフォンやゲーム機の誘惑をなんとか振り払い、机に向かった。時刻は午後九時、ここまではよかった。しかし、数学のワークを開いたその瞬間、強烈な睡魔に襲われ、あえなく撃沈。一ページも進まないまま、机に突っ伏して朝まで爆睡してしまうのだった。

作戦決行二日目、時刻は昨日と同じ午後九時。今日は昨日のようにはいかないぞ、睡魔よ。途中で眠ってしまわないよう、今日は秘策を考えてきたのだ。覚醒作用のあるカフェインの力を借りて夜更かしするという作戦である。調べたところ、身近なものではコーヒーに

多く含まれているらしいので、家にあるインスタントコーヒーを使うことにした。特に隠す事ではないが、普段コーヒーは飲まない私がいきなりコーヒーを飲んでいるところを両親に見られると、格好つけているように思われそうで何だか恥ずかしいので、両親にはバレないようこっそりコーヒーの粉を部屋に持ち込んだ。そこで私はある事に気がつく。お湯を忘れてしまった。しかし、今からキッチンに戻ってお湯を沸かすとなると、きっと両親に何をしているのか怪しまれるだろう。そこで私は何を考えたのか、なんとコーヒーの粉を直飲みするという奇行に走ったのだった。口に入れた瞬間、ザラザラとした不快感と苦味が口内を駆け巡る。ミルクコーヒーすら好んで飲まない私にとっては、お世辞にも美味しいとは言えない味だった。しかし数分後、少し前からうっすらと感じていた眠気が、驚くほど綺麗になくなっていたのだ。私は作戦の成功を喜びながら、軽い動きで宿題に取り組むのだった。

翌朝。やってしまった。自分が深夜まで起きていられるのが嬉しくて、つい徹夜してしまったのだ。宿題こそ進んだが、あれからまたちびちびとコーヒーの粉を舐めていたせいか、なんだか気だるい感じがして気持ち悪いし、何より眠い。珍しく自分で開けたカーテンの奥には曇り空が広がっており、沈んでいた気分に追い打ちをかけてくる。いつもより少し早く身支度を済ませ、しばらくコーヒーの粉は見たくない、と心の中で嘆きながら、私は

とぼとぼと通学路を歩いていくのだった。

奨励賞

「酒という謎」

宮城県仙台市　東北学院高等学校
芳賀　永都

私は酒が好きだ。

はじめに言っておこう。私は未成年であるが、誓って一滴も飲酒したことはない。そのことをご理解頂いた上で、私の話を聞いて頂きたい。

周りの友達はあまり疑問に思っていないようだが、酒という飲み物は謎が多い。

まず何味なんだかよく分からない。周りの大人達は苦いというが、その割には実にうまそうに飲むのである。

調べてみると酒の中でもとりわけ有名なビールというやつは、水と麦芽とホップという味や香り付けの植物から作られているそうだ。

つまるところビールは草と水だ。そりゃ苦いわけである。

しかし大人たちはその草と水を顔を赤らめ、呂律が回らなくなり、時には気分を害するまで大量に飲むのである。これはもはや異常行動と呼んでも差し支えないのではないだろうか。

それに飲んだときのあの大人の変貌っぷりには驚かされる。いつもは静かな私の叔母でさえ飲み始めた途端急に饒舌になるのだ。親戚の酒の席で何度あの周りのテンションについていけない感を味わったか分からない。本当にあの飲み物は合法なのかも疑わしい。

加えて種類も多すぎる。ビールなんて結局全部苦いらしいのになぜあんなに種類があるのか。大人はそんなに苦みを欲しているのか。

私がよく飲むコーラはスーパーには大体一種類しかおいていないのに対し、酒類は棚いっぱいに所狭しと並べられ、もはや明らかな不平等を隠そうともしない。こんなことが許されるのだろうか。いや、許されるはずがない。

しかもこの酒というやつはビールだけじゃ飽き足らず、他にも大量の種類があるのだ。ワイン、ウイスキー、ジン、日本酒など数え出したらキリがない。

かくいう私も最近ではそんなお酒の味が気になってしょうがなくなってきている。なにせ想像することもできない味なのだ。その価値は私の中でドラゴンや魔法と同じくらいのファンタジー性を帯びている。

そんな話を両親にすると彼らは

「一口飲んでみるか?」

などと未成年飲酒を助長してくる。

違う。私の言いたいことはそういうことではない。
私はやるならとことん知りたいのだ。それこそ顔を赤らめ、気分を害し、話に聞く二日酔いになろうとも自分の中で納得がいくまで飲んでみたいのだ。たった一口飲んだだけでいったい何を分かった気になれというのだ。
そう両親に熱弁をふるってみるものの、遠い昔に過ぎ去った時間だからかいまいちピンときていないようである。
仕方がないので私は一人で酒が向こうから近づいて来るのを待とうと思う。
二十歳まであと三年半。……長いな。

奨励賞

「高校生が愛について考えてみた結果」

神奈川県横浜市　ホライゾンジャパンインターナショナルスクール
藤田　椛子

「愛」とはいつも流行る曲や映画のテーマであるし、便利だな、と冷めた目で見てしまう。どんなにとんちんかんな歌詞でも、登場人物の行動にも、誰かが「それも愛の形」と言えば皆の疑問は収まる傾向にある。それって少しずるい。対照的に、それが「恋」だった場合、軽んじられる事が多い。例えば私が別れた彼氏を「愛していた」と嘆いたなら皆たくさん慰めてくれるだろう。けど同じ状況で私が「好きだった」と言った際、親身になって慰める声より「次があるよ」という声の方が絶対多い気がするのは、私だけだろうか。この違いはなんなのか。高校生の私は、恋と愛の違いもよく分からないのである。愛は恋の次のステップとぼんやり認識しているが、じゃあ何をしたら次のステップに進めるのかなどさっぱりである。ちなみに辞書で「愛」を引くと以下のような説明がある。「ひろく、人間や生物への思いやり」。想像以上に抽象的ではないか。反対に恋は愛に比べて具体的である。「一緒に生活できない人や亡くなった人に強くひかれて、切なく思うこと」。愛の定義よりかは納得がいくし想像がつきやすい。そういう点では恋の方がまだ若い私にとって親しみやす

いということか。
愛の象徴といえば、シェイクスピアのロミオとジュリエットだろうが、私なりに異論がいくつかある。中学生の頃ロミオとジュリエットを初めて読んだ際、なんて登場人物は浅はかなのだろうかと絶望した記憶がある。パーティーで一目惚れをして、短期間のうちに両親の承諾も得ず結婚をし、周囲の反対の末心中。こんなコントのような愛があってたまるものか。ただの若者の行き過ぎた浅はかな言動にしか捉えられなかった。私の最初の感想は「パリスが可哀想！」だったのを覚えている。婚約者であった愛しのジュリエットの墓参りに行った際、ロミオと鉢合わせ、決闘で殺されてしまうのである。巻き込み事故にも程がある。私はパリスの方がロミオよりジュリエットを想っていたと思う。婚約者が亡くなったにも関わらず、引き篭らず彼女の墓を訪れ花を手向ける行為の方がよっぽど純粋で思いやりを感じる。故私はロミオとジュリエットに愛のかけらも感じない。その代わり彼らは恋をしていたんだと解釈している。お互い一緒に暮らしていない相手に強く惹かれていたし、広辞苑も納得するのではないか。
もしロミオとジュリエットの短期間の情熱と置き換えるのならば、もしかしたら半永久的な相手を思いやる心情を愛と呼ぶのかもしれない。親はどうだ。私は子育てを経験したことがないから親の感情など全く知らないが、親の約二〇年に渡る継続性や自身の子供を

危険なことから守る行為は強い思いやりがないと成し得ない。これは多大なる愛なのではないか。これはペットを飼っている人にもパートナーにも共通する。だとしたら恋が愛に変わる要素は「継続性」と「守る行為」だろう。この継続性というのは半永久的だと考察する。親が二〇年間の子育てを終えて子供が家を出たらその強い思いやりは消えるのだろうか。否、きっと死ぬ瞬間まで自分の子を愛するのが、本来のあるべき姿であろう。

もしこの持論が本当だとするなら、私たち高校生が誰かを愛したことがないのは納得である。まだ子供である故、私たちは愛を受け取る側であり、まだ人を愛するには若すぎるのである。その代わり私たちは、ロミオとジュリエットのように刺激的な生活を送っている。まだ体験したことのない経験や感情が待っていて、日々新しいことを学んでいくのである。だから高校生には継続性とか、平穏な感情ではなく、短期間の情熱的な恋の方が似合うのだ。

ここまで愛について熟考したからには、誰かを愛してみたいなどかっこよく言ってみたいが、まだ誰かに恋をしていない手前、愛を知るにはまだ一〇〇年早い気がしてきた。だとしたら残りの高校生活、私は小説のようなキラキラした恋を、愛を知る前に経験したい。

第１回　有吉佐和子文学賞
概　　要

■応募資格

中学生以上

■募集内容

エッセイ

※テーマは問いませんので、ご自由にお書きください。

■応募方法

郵送、持参またはメールのいずれかで応募してください。

- 郵送または持参の場合は、作品に応募用紙を添付してください。
  持参される場合は市役所閉庁日を除く、平日８時３０分から１７時１５分の間に市役所１０階文化振興課の窓口へ直接お越しください。
- メールの場合は、件名を「有吉佐和子文学賞」として、作品を添付し、本文に応募用紙と同じ内容を記載してください。

■応募締切

令和６年３月１５日（金）

- 郵送の場合　　必着
- 持参の場合　　１７時１５分まで
- メールの場合　当日受信分

■賞

入賞は最優秀賞 １編、優秀賞 １編、佳作 ５編、奨励賞 若干数とし、入賞者には、表彰状および副賞として以下の各金額相当の図書カードを贈呈します。

最優秀賞	1編	50,000円
優 秀 賞	1編	30,000円
佳　　作	5編	10,000円
奨 励 賞	若干数	5,000円

※審査結果により、該当作品がない場合があります。

※奨励賞は中学生および高校生の作品のみ対象です。

■発表

入賞者に直接通知するとともに、和歌山市ホームページで結果を公表する予定です。

※入賞作品発表時には、氏名を公表します。（中学生および高校生の方は学校名、学年を公表します。）

■表彰式

日時：令和６年６月２日（日）
　　　午後１時３０分から

会場：和歌山市立有吉佐和子記念館

■応募規定

- 応募は１人１編に限ります。
- ４００字詰め原稿用紙を使用し、縦書き２枚以上５枚以内で作成してください。
  パソコン等で執筆される場合はＡ４判用紙に２０字 ×２０行の縦書き２枚以上５枚以内で作成してください。
- 原稿用紙の１行目に「題名」を記載し、２行目から「本文」を書き出してください。
- 下記応募用紙に、応募作品の題名、氏名、住所、電話番号、生年月日、E-mail アドレス（お持ちの方）、中学生および高校生の方は学校名・学年、今回の募集を知った方法を明記のうえ、原稿用紙表面の右上に重ね、右上１か所にホチキス留めをして提出してください。
- 作品は日本語で書かれた本人のオリジナル作品で、未発表のものに限ります。AI（人工知能）文章生成ツールによる作品、他人の作品等を流用した作品は選考対象外になります。
- 第三者の権利を侵害する作品、第三者を誹謗中傷する作品の応募は不可とします。
- 他の文学賞との二重投稿および過去に入賞した作品の応募は禁止します。

■応募上の注意

- 応募後の作品の変更・差し替えは認められません。
- 応募作品は原則として返却しません。
- 入賞作品の著作権は和歌山市に帰属します。
- 入賞作品は、和歌山市ホームページやＳＮＳ等に掲載する場合があります。
- 選考に関するお問い合わせには一切お答えできませんので、ご了承ください。
- 応募に関する個人情報は「有吉佐和子文学賞」に関する業務以外では使用しません。
- 募集要項に違反した場合は、受賞後であっても賞を取り消す場合があります。

■応募先および問い合わせ先

〒640−8511
和歌山市七番丁２３番地
和歌山市文化振興課
Tel：０７３−４３５−１１９４
E-mail：bunkashinko@city.wakayama.lg.jp

■**応募状況**　応募総数　２，０７７編

（編）

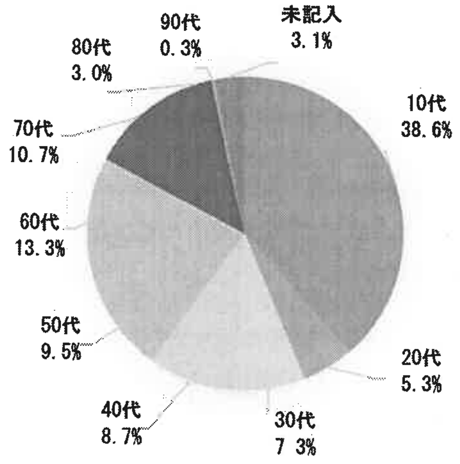
応募区分		和歌山県内			他府県	海外	不明
		市内	市外	県合計			
一　般	1,289	152	112	264	1,001	12	12
高校生	165	57	3	60	105	0	0
中学生	623	351	40	391	232	0	0
合　計	2,077	560	155	715	1,338	12	12

中学生は個人応募を含め、市内１０校、県内３校、県外１８校から応募があり、高校生は個人応募を含め、市内８校、県内３校、県外４３校から応募があった。

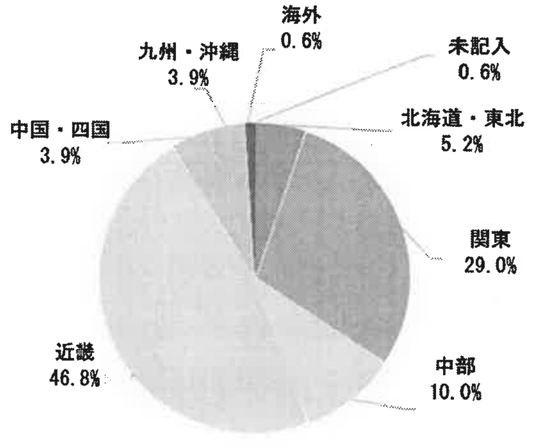
年齢別では、１０代からの応募が最も多く８０１人であり、全体の約４割を占めた。９０代まで、すべての年代の方から、非常に多くの作品応募があり、最年少は中学１年生、最高齢の方は９９歳の方であった。

４７都道府県すべてから応募があり、海外からの応募はアメリカ、カナダ、フランス、イギリス、ベルギー、オーストラリア、中国、韓国、台湾からであった。

≪年齢別　割合≫



≪地域別　割合≫



（人）

10代	801	60代	277
20代	110	70代	223
30代	152	80代	63
40代	181	90代	7
50代	198	未記入	65
		合計	2,077

（人）

北海道・東北	108	中国・四国	81
関東	603	九州・沖縄	81
中部	208	海外	12
近畿	972	未記入	12
		合計	2,077

第１回　有吉佐和子文学賞
入賞作品集

編集・発行　和歌山市
〒640-8511　和歌山県和歌山市七番丁２３番地
ＴＥＬ　０７３－４３５－１１９４